



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宮沢賢治文学における植民地主義と越境への意志 : 「鹿踊りのはじまり」、「狼森と箕森、盗森」、「なめとこ山の熊」
Author(s)	閻, 慧; Yan, Hui
Citation	研究論集, 15, 93(右)-106(右)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.r93
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60574
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_021_yan.pdf



宮沢賢治文学における植民地主義と越境への意志

——「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笹森、盗森」、「なめとこ山の熊」——

閻 慧

要 旨

本稿は、宮沢賢治が考古学者の視線で描く三部作——「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笹森、盗森」、「なめとこ山の熊」を取り上げ、それを一つの作品群として考察するものである。賢治文学における植民地主義の表現は、地理的越境と文化的越境という二つの意味での越境への意志によって表現されている。そこで、まず、三作品における越境表象を確認しながら、そこに現れる〈自然—人間〉の関係性の変化を中心に分析する。また、賢治文学における〈自然—人間〉の関係性の変化のモデルになるものとして、北海道の開拓状況およびアイヌ民族社会の解体について考察する。その上で、賢治が考えている異文化交流・越境がなぜ困難さに遭遇するのか、また賢治が如何なる視線で植民地主義思想を眺めるのかを解明する。

直接的な異文化接触を描く「鹿踊りのはじまり」では、動物と人間がお互いに観察する視線が注視され、異文化に対する探索、人間と動物との越境が描かれている。同じ入植のモチーフで繋がる「狼森と笹森、盗森」では、自然と人間との間に、〈贈与—返礼〉という互惠関係が形成され、またその関係性が変容する過程が描かれる。その原因は、入植者である人間が自分の権力を拡大し、正当化しようとすることにあり、植民地主義の考え方に類似する。両作品に共通する額縁構造の聞き手の異なる行為に注目すると、自然と人間との関係性に変化をもたらすのは資本の介入だということがわかる。「なめとこ山の熊」では、貨幣を交換の媒介とする商品経済の環境における、自然、資本の論理、人間の三者の葛藤が描かれている。〈自然—人間〉の二者関係に、資本の論理が介入し、賢治が考えている異文化交流・越境の困難さに遭遇する物語が描かれる。

本稿では、賢治と北海道との関わりを手掛かりとして考察することで、北海道開拓とアイヌ民族社会解体の時代状況と賢治文学の照合性が検証される。それと同時に、自然と人間、入植者と先住民との矛盾・衝突の原因は資本の論理にあるという賢治の考えが明らかになる。

1. はじめに

『国文学 解釈と教材の研究』特集「宮沢賢治の作品——《Versions》あるいは《群》として読む」(第四一卷第七号、一九九六年六月号)において、宮沢賢治の単独の作品を組み合わせ、一つのシリーズとして解説する可能性が呈示されている。同一人物の多作品での登場、多数の作品に一貫するモチーフの存在、あるいは改稿過程における作品間の相互引用、賢治テクストのいずれの特徴も、それら《Versions》あるいは《群》として読むことの可能性を示唆している。このように解説することで、宮沢賢治とその文学の多様な側面が浮かび上がるのである。そこで、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笹森、盗森」、「なめとこ山の熊」という、宮沢賢治が考古学者の視線で描く三作品を取り上げ、それを一つの作品群として読むことを試みる。

宮沢賢治の考古学者としての視線は、植民地主義の展開という歴史的文脈と繋がることよって表出してくる。賢治文学における植民地化のモチーフを主に二つの段階に分けるとすれば、まず、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笹森、盗森」に現われる農耕民定住に伴う入植プロセスである。この段階では、〈自然—人間〉の間の交流と葛藤がメインに描かれている。次に、資本の論理の介入によって、〈自然—人間〉の二者関係は、〈自然—資本の論理—人間〉の三者関係までに複雑化していく。そうした状況における人間の葛藤と困惑を描くのは、「なめとこ山の熊」である。

また、こうした歴史的な展開は、賢治文学において、越境へ

の意志によって度々表現されている。越境というモチーフは、賢治テクストでは二つの意味を持つ。一つは入植活動による地理的な越境である。入植というのは、遊牧民あるいは元々他の地域に住む人々が、新しい土地に移住することに伴って行われている行為である。つまり、人々がそもそも活動する範囲の境界線を越える行為である。他方、賢治文学に登場する人物、動物、また植物などの生き物は、異種の存在に対して、何らかの形でお互いに接触し、理解しようとしている。これは、異文化交流という意味での、文化的な越境である。このような二つの意味の越境は、一方では賢治テクストに潜む歴史的な文脈の特徴を表し、もう一方では、賢治自身が抱いている共生主義の願望をも表現している。

本稿では、近代日本における植民地主義の展開という歴史的な文脈と賢治が抱く越境という個人的理想について、賢治文学の読解を通じて考察する。そこで、まず、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笹森、盗森」、「なめとこ山の熊」における越境表象を確認しながら、三作品に現れる〈自然—人間〉の関係性の変化を中心に分析する。また、賢治文学における〈自然—人間〉の関係性の変化のモデルになるものとして、北海道の開拓状況およびアイヌ民族社会の解体について考察する。その上で、賢治が考えている越境がなぜ困難さに遭遇するのか、また賢治が如何なる視線で植民地主義を眺めているのかを解明する。

2. 〈自然―人間〉原始的交渉の形成――

「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笹森、盗森」

最初に賢治文学から歴史的文脈を読み取ったのは、小森陽一の『最新宮沢賢治講義』（朝日新聞社、一九九六年）である。そこにおいて、氏は「鹿踊りのはじまり」と「狼森と笹森、盗森」を入植のはじまりを描く物語として読み取っている。作品の構造からみれば、両作品は同じく額縁構造によって構成されている。額縁になつてゐるのは、話し手である巖・風と聞き手である「私」との会話の回路である。かつての人間と自然とが交渉するプロセスは、額縁に囲まれる風景であつた。このような額縁構造から、口承文学の特徴が見いだせる。昔の話を聞いた「私」が、それを文字にすることで、「鹿踊りのはじまり」と「狼森と笹森、盗森」という作品が誕生する。この意味では、この二作品は、入植の歴史の記録だけではなく、口承文学から記録文学へと至る文学発展史の再現とも言える。

では、構造的な共通性を持つてゐる両作品において、描かれる〈自然―人間〉の交渉も、共通するのだろうか。それとも、それぞれ異なるのだろうか。

「鹿踊りのはじまり」と「狼森と笹森、盗森」は、ともに賢治生前に出版された唯一の童話集『注文の多い料理店』に収録されている。『注文の多い料理店』広告チラシ（大）では、「鹿踊りのはじまり」について、「まだ割れない巨きな愛の感情」、「ひとは自分と鹿との区別を忘れ、いつしよに踊らうさへします」という解説文が掲載され

てゐる。「鹿踊りのはじまり」は、北上川の東から田畑を拓くため移住してきた嘉十と鹿の物語である。嘉十が湯治の帰路の途中、手拭いを置き忘れた野原に戻り、六匹の鹿が、手拭いが如何なるものかを検討する過程を目撃したことが語られている。この作品において、人間が一方的に自然を観察する眼差しだけではなく、鹿が異種の人間からもたらされた手拭いを観察する眼差しも細かく描かれてゐる。

嘉十にはかに耳がきいんとなりました。そしてがたがたふるえました。鹿どもの風にゆれる草穂のやうな気もちが、波になつて伝はつて来たのでした。

嘉十はほんたうにじぶんの耳を疑ひました。それは鹿のことがきこえてきたからです！

このように、嘉十は突然の知覚の変質によって、鹿の世界の感情を共有することができるようになる。一匹目の鹿は「白い長いやづあ」、「縦に皺の寄つたもん」という外見を認知する。二匹目は、視覚の認知以外に、「柳の葉みだいな匂」という嗅覚的認知をする。三番目の鹿は「息の音あ為ないがけあな。口も無いやうだけあな」という聴覚認知と視覚認知の面から確認する。また、四番目の鹿は「おう、柔つけもんだぞ」、「汗臭いも」という触覚的、嗅覚的な特徴を認識する。さらに、五番目の鹿は「舌を出して手拭を一つべろりと嘗め」、「味無いがたな」と味覚から認識する。鹿たちは自分が見た

ことのない異物に対して、あらゆる手段でそれを認識するように努めている。これと同時に、「嘉助はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じぶんまでが鹿のやうな気がして、いまにもとび出さうとし」、鹿のめぐりを見終わった後、「まったくじぶんと鹿とのちがひを忘れて」、一緒に踊ろうとする。鹿の人に対する理解と、人の鹿に対する理解は、同時に相互的に進行しているのである。相互の理解の仕方は異なり、最後に、嘉十の姿を見て驚いた鹿は逃げる。このように異文化交流の困難さを描いてもいるが、賢治は人間と動物との越境を描くことで、異文化交流の可能性を提示している。

そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあひだから、夕陽は赤くなゝめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました〔一〕。

冒頭部分で言及された鹿踊りの「ほんたうの精神」は、異種の生き物がお互いに理解しあうプロセス、すなわち異文化交流の可能性にあるだろう。西成彦は人間と動物との異文化接触の中で用いられた擬人法について、それは「動物たちをかいならすための、文字通り『法』であつた」と主張している。しかし、「鹿踊りのはじまり」においては、動物は下位に位置し、人間にコントロールされるので

はなく、人間と対等な位置に置かれている。つまり、賢治の擬人法は、動物に対する人間の支配の象徴という西成彦の考え方に収まらない。人間と動物の感情共有が実現したり、風の声も人の言葉に聞こえたりするように、「鹿踊りのはじまり」における擬人法の使用は、自然と人間との調和を表現する方法として理解することができる。「鹿踊りのはじまり」と同じように、「狼森と笹森、盗森」も入植者と自然が交渉する物語として読むことができる。しかし、その交渉の仕方はまた異なる形式によって表れている。

ずうつと昔、岩手山が、何べんも噴火しました。その灰でそこらはすつかり埋まりました。このまつ黒な巨な巖も、やつぱり山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのださうです。噴火がやつとしづまると、野原や丘には、穂のある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、たうたうそこらいつぱいになり、それから柏や松も生え出し、しまひに、いまの四つの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思つてゐるだけでした。

「狼森と笹森、盗森」においては、このような不毛の地から森になるまでの歴史の経緯を表す描写によつてはじまる。自然だけが存在し、森の名前すら存在しないことから、これは人間が一方的に自然を支配する前の話だとわかる。それは、名付けることそのものが、言葉を使う人間の痕跡だからである。森を名付けることとともに、

人間の入植の歴史が始まるのである。最初に森にやってきた人間は、森の許可を得て、畑を起した。人間は森から木をもらい、家を建て、春になり、蕎麦や稗を蒔くことになる。しかし、子供、農具、粟が消えるようになり、森に行つて調べてみると、それは狼森の狼、笹森の山男と盗森の仕業だとわかる。このような悪戯をされる農民たちは、その度にそれぞれの森に粟もちを供えるようになったのである。

『注文の多い料理店』の広告チラシ（大）では、「狼森と笹森、盗森」について、「人と森の原始的な交渉で、自然の順違二面が農民と与へた永い間の印象」だという解説が書かれている。「狼森と笹森、盗森」の物語では、人間が一方的に支配するのではなく、森が代表する自然と人間との間の優位関係はまだ付けられていない。このような二者関係は、〈森の贈与—人間の返礼〉のプロセスによつてバランスが取られている。

ただし、「狼森と笹森、盗森」における〈贈与—返礼〉というプロセスにおいて、人間の態度の変化には注目すべきである。狼森の場合、みんなは子供をつれて森を出ようとする時、狼どもの「悪く思わないで呉ろ。栗だのきのこだの、うんとご馳走したぞ」という叫び声が聞こえ、家に帰つてから、自発的に「栗餅をこしらへてお礼に狼森に置いて来」たのである。これらの栗餅は子供を返すことのお礼であると同時に、狼の脅威に対する畏敬の念、つまり二度と子供たちを隠さないでほしいという願望をも含まれる。しかし、笹森の場合では、みんなは農具の消失を山男の悪戯だと見なし、狼に

対する恐怖感はなくなる。「おらさも栗餅持つて来て呉ろよ」という山男の要求に対して、みんなは「あつはあつはと笑つて」、栗餅をこしらえ、狼森と笹森に持つていった。さらに、栗消失の事件では、みんなは盗森に対して、「名からしてぬすと臭い」という先入観を持ち、粟を奪うのは自分の財産を侵犯することだと認定している。したがつて、「少し砂がはいつてゐた」栗餅を盗森に持つていくのは、すでに返礼ではなくなり、粟の所有権を示す示威行為だと考えられる。

それから森もすっかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと栗餅も貰ひました。

しかしその栗餅も、時節がら、ずるぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまつくろな巨きな巖がおしまひに云つてゐました⁵。

この「人と森の原始的な交渉」の過程において、〈贈与—返礼〉の関係性は、最初に人間の森に対する感謝や畏敬の気持ちに基づき、形成されている。しかし、時間が経ち、新しい土地での入植生活になれると、人口の増加に伴い、人間の自己優越感への自覚は、〈贈与—返礼〉の内実に変化をもたらずのだ。森の贈与は、人間にとつて、だんだんあたりまえのことになつてしまひ、人間の返礼であるはずの栗餅は、かえつて自然への贈与のように逆転する。結局、人間社会の発展過程において、〈贈与—返礼〉という互惠関係は、形だけが

残され、人間が自然に対して主導的地位を占めることによって崩されていく。作中の人間たちは活動範囲の拡張とともに、自分の権力を拡大し、それを正当化しようとする。これは植民地主義の思考と非常に相似する事柄であろう。

以上の分析から見れば、いずれも同じく人間の入植を描く物語であるが、両作品における植民地主義的表現は異なる。「鹿踊りのはじまり」の入植プロセスにおいては、入植者と先住者が対等に異文化交流を行う可能性が描かれる。しかし、「狼森と笹森、盗森」の入植プロセスにおいては、先住者に対する入植者の一方的な支配が強くなる傾向によって表現される。このような差異は、作品に登場する人間の態度から生じる結果だろう。登場人物だけではなく、両作品の聞き手としての「私」にも注目すれば、明らかな差異が見られる。それは貨幣が代表する資本の論理の介入によって、〈自然―人間〉の関係にもたらされた新たな影響である。次節では、「なめとこ山の熊」を加え、この関係性の変化を確認する。

3. 資本の論理の「勝利」——「なめとこ山の熊」

本節において、まず、注目したいのは、聞き手としての「私」と、語られた物語の中の人間との区別である。風や巖が話してくれる話の中に登場する人間とは違い、聞き手としての「私」は商品経済の環境に生きている人間である。「鹿踊りのはじまり」における聞き手の「私」は、結末にしか登場していない。「私」は鹿たちと直接に交

流することがなかったが、嘉十と鹿たちのやり取りを一種の美談として、懐かしんでいる。しかし、「狼森と笹森、盗森」に登場する聞き手の「私」は、まったく異質な自然との交渉の仕方をしている。

この森が私へこの話をしたあとで、私は財布からありつきの銅貨を七銭出して、お礼にやったのですが、この森は仲々受け取りませんでした、この位気性がさっぱりとしてみえますから。

「私」が銅貨でお礼をしようとする行為は、貨幣が普遍化することに基づき、人間が資本の論理に従って自然と接することの表れであろう。「鹿踊りのはじまり」に現れるより調和的な〈自然―人間〉構図ではなく、「狼森と笹森、盗森」では、森が「私」の銅貨を拒絶し、人間の処世術に対する違和感を示す。貨幣が代表する資本の論理が人間社会に蔓延することに伴い、資本の論理と自然との間に挟まっている人間の葛藤は、賢治の作品にしばしば出てくるモチーフとなる。「なめとこ山の熊」に登場する猟師・淵沢小十郎はこの典型的な人物である。

作品の構造から見れば、「なめとこ山の熊」は、前述の両作品と同じく額縁構造で構成されている。登場人物の淵沢小十郎は、熊の言葉さえわかり、本当は熊を捕りたくない熊捕名人である。熊たちも小十郎のことが大好きだ。「なめとこ山の熊」はこのように、お互いに愛し合う人と熊の間の葛藤を、傍観者である「私」の目線によって記録する物語である。賢治の作品において、登場人物を矛盾のジ

レンマに陥らせるのはよくあることである。「よだかの星」において、自分が生きるためにたくさん虫を食べ、その命を奪うことで苦悩するよだかの姿は小十郎を彷彿とさせるだろう。では、小十郎が熊を殺したくないのに、殺さなければならぬのは、なぜなのか。

「熊。おれはてまへを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめへも射たなけあならねえ。ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまつたし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞするんだ。てめえも熊に生まれたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生まれなよ。」⁷

生きるために、小十郎は猟師以外の選択肢がない。この小十郎の熊の死体に対する発言には、運命を変えることができない無力感があふれている。とくに、熊母子の対話を目撃した後、自分の仕事が熊の平和な生活を毀していることに、小十郎の心理的負債感は一層に強まる。しかし、小十郎は熊を捕ることを止めなかった。彼は町の荒物屋に行き、二円——大きな銀貨四枚を「押しいたゞくやうにしてにかにかしながら受け取った」。荒物屋の旦那さんに一生けん命願ったのに、二円しかもらえなかつたものの、小十郎は、「もううれしくてわくわくしてゐる」のだ。

豪儀な小十郎がまちへ熊の皮と胆を売りに行くときのみぢめさ

と云つたら全く気の毒だった。〔…〕

いくら物価の安いときだつて熊の毛皮二枚で二円はあんまり安いと誰でも思ふ。実に安いしあんまり安いことは小十郎でも知つてゐる。けれどもどうして小十郎はそんな町の荒物屋なんかへでなしにほかの人へどしどし売れないか。それはなぜか大いの人にはわからない。けれども日本では狐けんといふものもあつて狐は猟師に負け猟師は旦那に負けるときまつてゐる。こゝでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられる。旦那は町の中の中にあるからなかなか熊に食はれない。けれどもこんないやなづるいやつらは世界がだんだん進歩するとひとりで消えてなくなつて行く。僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらも見たくないやうないややつにうまくやられることを書いたのが実にしやくにさわつてたまらない。

前述した両作品とは異なり、「なめとこ山の熊」においては、話者は入れ子物語の枠を飛び越し、直接に自分の立場を表すのである。このように、無抵抗の小十郎の代わりに、傍観者である「私」は貨幣を媒介とする商品経済における交換の不平等性を批判する。商品経済の段階では、荒物屋の旦那のような一部の人間が、利潤の追求と資本の蓄積を目指している。彼らはあらゆるものを商品として扱い、お金だけを価値判断の標準とし、資本を持たない人々を搾取する。千葉一幹はこのような貨幣を介した商品経済の交換に潜む媒介性に注目し、賢治の媒介性に対する嫌悪を読み取り、「なめとこ山の

熊」を「貨幣という媒介物を経た交換から、物々交換への転回を描いた作品」として評する。作品の結末に、熊の一撃で、小十郎は落命する。まるで物々交換のように、自分の体をなげうつことで、小十郎はこれまで熊を殺してきたことをあがなう。荒物屋の主人が熊に支払うべき負債を、なぜ小十郎が返済しなければならぬのか。それは小十郎が荒物屋の旦那から二円をもらったからである。このような貨幣を介した交換を避けるため、賢治は小十郎に死をもたらし、「貨幣という媒介物を経た交換を拒絶した上で」、「悲壮なまでに美しい」¹⁰物々交換が実現したと、千葉一幹は述べている。

「なめとこ山の熊」に見られた貨幣を介した交換への嫌悪は、そこに潜む媒介性に理由があると、千葉一幹は指摘している。では、貨幣を介した交換に潜む媒介性は、なぜ嫌われるのだろうか。それは貨幣による交換過程において、必ず犠牲が生まれるからだと考えられる。この犠牲はまず自然の側に現れる。熊が殺されるように、あらゆるものを商品化することによって、〈自然―人間〉の間のバランスは崩壊し、支配者と被支配者の対極分化が生じてくる。次に、犠牲は小十郎のような資本を持たない人々にも生じる。自然と資本の論理の間で板挟みになる小十郎は、結局自分の命を捧げるしかない。このように見れば、「狼森と笹森、盗森」において、近代文明に馴染む話者「私」の森に対する貨幣のお礼が拒否されるのは、このような犠牲を避け、〈自然―人間〉の関係性のバランスを維持するためである。

賢治文学に度々現れる自然と人間、また先住民と入植者の矛盾の

関係性という課題に対して、賢治は異文化理解という解決策を考えているのである。「狼森と笹森、盗森」における〈自然―人間〉の関係性のバランス維持は、賢治の考え方の一つの表現である。また、「鹿踊りのはじまり」における嘉十と鹿、「なめとこ山の熊」における愛しながら殺しあう小十郎と熊、言葉が通じ合う風景も、その表現の一つである。ただし、これらの賢治が理想とする異文化理解の解決策は、「なめとこ山の熊」の悲しい結末が示唆するように、貨幣経済の環境において、その実施の困難さが現れてくる。それは賢治自身が置かれた時代においても、まったく同じ状況が見られる。そこで、次節で確認しておきたいのは、賢治が異文化理解の理想を抱く背景にある時代の動きであり、そして、そうした時代を賢治はどのような視線で眺めていたかである。

4. 賢治が生きた時代――

北海道開拓とアイヌ民族社会の解体について

「なめとこ山の熊」における荒物屋の旦那、獵師・小十郎、熊の三者のそれぞれの方言配分に注目し、作品を「多言語主義的な実験小説」¹¹として評するのは西成彦である。氏は宮沢賢治のように、「クレオール言語を生み出す複数言語・複数文化的環境の社会的現実を、「…」寓意としてなぞってみせる文学」¹²をクレオール文学と定義している。西の指摘からわかるように、宮沢賢治は明らかに多文化主義者である。多文化主義者である賢治を育て、賢治文学に現れる異

文化のモチーフに、現実的なモデルを提供するのは植民地的環境だと考えられる。西成彦は、さきに言及した「東北文学論」において、賢治が置かれている植民地的環境の起源を、古代から植民地性質を持つている東北地方から探っている。そこで、本節では、植民地を見る目線をさらに北のほうへ向け、日本の内国植民地であった北海道の開拓状況から考察していく。

なぜ北海道の開拓状況に注目するのだろうか。それは内国植民地とされている北海道には、日本の植民政策の起源があるためである。近代日本の言説空間において、「新世界」としての象徴的な意味を帯びている北海道は、異文化の接触と衝突がしばしば上演される土地である。そして、このような北海道は賢治にとって、重要な場所だと言える。彼はその短い生涯で、三回ほどこの土地を訪れた。それによって、賢治自身は、異文化と接触する機会を得ている。秋枝美保が『宮沢賢治 北方への志向』（朝文社、一九九六年）において検証したように、賢治は北方の大地およびそこに生活している先住民族に対して、明らかに関心を持っているのである。賢治文学において描かれる越境の表象、また異文化交流の風景は、異文化の併存・干渉・変容の舞台である内国植民地・北海道の存在とは、関係がないとは言えないだろう。

北海道には、水稲耕作を基本とする弥生文化が到達せず、縄縄文化や擦文文化を経て、アイヌ文化の時代を迎えた。一八六八年、明治政府が蝦夷地を北海道と改称し、開拓使を設置し、北海道に対する領有を宣言した。その後、開拓十年計画が決定され、農業、漁

業、鉱工業、商業の資本主義化が構想され、箱館、東京、東北各地、さらに九州で募集された移民を、北海道という新開地に入植せよとした¹³。このような開拓熱とともに進んでいくのはアイヌ民族社会の解体である。明治政府はアイヌ民族の伝統的生活習慣や信仰を禁止し、アイヌ人を平民籍に編入し、勸農政策を実施する¹⁴。これは、入植者と先住民との間に行われる支配関係の調整である。結果的には、アイヌ民族と和人は同化され、同じ「日本人」のカテゴリーに括られる。このプロセスにおいて、アイヌ民族の抵抗があったものの、その生活権を奪う措置が行われている。

アイヌの生業の一つである鹿猟を例とすると、一八七五年には仕掛け弓、毒矢が制限され、翌一八七六年十一月ケブロン（引用者注・当時の開拓次官の黒田清隆に招聘された前合衆国農務局総裁フォーレス・ケブロンのこと）の助言で鹿猟規則が公布され、有料鑑札制（六〇〇人に限定）、毒矢の禁止を決めたが、アイヌの鑑札料は免除され、またアイヌへの鉄砲の貸与は認められた。[…:]しかしやはり和人の鉄砲猟師がエゾシカを大量に射殺し、エゾシカの急減を招いている。鹿肉の缶詰工場もエゾシカの乱獲に拍車をかけた。アイヌたちも目先の収入を得るために、乱獲に走った。こうした一八八〇年には釧路国一円で鹿猟を禁止せざるを得なくなっている。また牧場の拡大もエゾシカの生息地の減少をもたらした。和人の開拓Ⅱ侵入は資源そのものの枯渇を結果した¹⁵。

北海道の開拓過程におけるこのようなエピソードは、「なめとこ山の熊」の物語と、非常に高い照合性を持っているだろう。「日本では狐けんといふものもあつて狐は猟師に負け、熊は且那に負けるときまっている」。熊は小十郎にやられ小十郎が且那にやられるように、エゾシカはアイヌ猟師にやられ、アイヌ猟師は資本の論理に翻弄され、和人開拓者にやられる。では、北海道が開拓される前に、先住民・アイヌと熊との関係はどのようなものであろうか。

アイヌ文化の中の宗教的側面では、イオマンテに代表される「送り」は中核の位置を示している。「送り」という行為は、動物などの遺体を土中に埋葬することによって、彼らの霊的存在を別の世でやすらかにさせる、一種の宗教的儀礼である。これは、動物に、人間と同様の尊厳を認める儀礼だと言える¹⁶。アイヌ文化におけるイオマンテに見られる基本的な姿勢は神への感謝であり、「神から与えられる『もの』に対する人間の側からの丁寧なお返し『送り』という形式で表現されている」¹⁷。イオマンテは、動物に限定されるものではないが、ふつう「熊祭」と言われるもので、アイヌ民族の考え方は、最高の形態での「送り儀礼」である。つまり、アイヌ民族社会では、アイヌ（人間）は世界を構成する唯一の主体ではなく、人間以外のあらゆる動植物や自然現象なども尊敬すべき存在である。しかし、北海道開拓の進展に伴い、アイヌ民族は和人の文化に同化され、イオマンテが代表する〈贈与―返礼〉という人間と自然の関係図も崩される。アイヌ民族の伝統的な狩猟の生活方式は、商品経済社会における利潤を求める手段となってしまう。このような

北海道開拓期にある、アイヌ民族の人々と自然との関係の変化の結果は、「なめとこ山の熊」のような賢治文学において、再演されている。

一九二三年、花巻農学校の教師を務める賢治は、生徒を引率して北海道へと修学旅行に出掛けた。後に賢治が書いた「修学旅行復命書」¹⁸には、札幌の植物園博物館での見聞について、「道産の大なる罌熊の剝製生徒等の注意を集む」、「階上のアイヌに関する標本並に札幌附近雑草の標本亦よき教材なり」という内容が記録されている。博物館にあるこれらの陳列が、北海道開拓に伴う歴史的事情を賢治に意識させたことは明らかである。それはアイヌ民族社会の解体であり、イオマンテに代表されるアイヌ文化の衰退の歴史状況でもある。北海道の先住民民族にこのような衝撃的な影響をもたらしたのは、植民地主義であるということに対して、賢治は無自覚だったかもしれない。しかし、賢治はアイヌ民族の物寂しい歴史状況を視野に入れたに間違いはない。一九二七年に書かれた「なめとこ山の熊」の悲壮な物語の背景には、賢治の一九二三年の北海道訪問で見られた歴史的状况があると考えられる。

5. 宮沢賢治と近代日本の植民地主義

賢治は「なめとこ山の熊」において、自然と資本の板挟みになった小十郎が面するジレンマを描いている。しかし、小十郎の現実的なモデルを提供するアイヌ民族の状況に対して、それが当時の北海

道で行われた植民地政策の結果だと、賢治は無自覚的に受け入れたようである。当時の北海道の植民地主義に対して、賢治の目が向けられているのは、その裏に繁殖する残酷な一面ではなく、農業発展や技術導入など、植民地政策の好影響だと思われる。例えば、一九二三年の北海道訪問で、賢治は植民館を訪れた後、以下のような感想を述べている。

植民館に赴く。中に開墾順序の模型あり。陰惨荒涼たる林野先づ開拓使庁官によりて毎五町歩宛区劃を設定せられ、当時内地敗残の移住民、各一戸宛此処に地を与へらる。然も初めて杲然として為すなく、技術者来り教ふるに及んで漸く起ちて斧刀を振り未耜を把る。近隣互に相勵まして耕稼を行ふ。圃地次第に成り陽光漸く徧く交通開け学校起り遂に樂しき田園を形成するまで誰か涙なくして之を觀るを得んや。恐らくは本模型の生徒将来に及ぼす影響極めて大なるべし。望むらくは本県亦物産館の中に理想的農民住居の模型数箇を備へ將來の農民に樂しく明るき田園を形成せしむるの目標を与へられんことを¹⁹。

このような記述から、北海道で行われる開拓の結果に対して、賢治が賛美や憧れの態度を持ったのは明らかである。また、賢治の植民地主義に対する考え方の形成には、彼が尊敬する人物たちから受けた影響が認められるだろう。一九二三年の修学旅行では、賢治は北海道帝国大学にも訪問していた。賢治一行を招待したのは、当時

の北海道帝国大学総長・佐藤昌介である。北海道帝国大学の前身である札幌農学校は、日本の植民地農業の課題をになつて設置されたものである。後に北海道帝国大学になつてから、初代総長を務めた佐藤昌介は、花巻出身で、宮沢賢治と同郷である。また、間接的に賢治に影響を与えている内村鑑三、新渡戸稲造は、ともに札幌農学校出身の有名人であり、のちに新渡戸稲造は、植民地経営の専門家ともなっている。賢治が北海道帝国大学を訪問した時、佐藤昌介総長の訓辞も聞いているのだが、その要旨について、賢治は「修学旅行復命書」において、以下のようにまとめている。

要旨まづ新開地と旧き農業地とに於る農業者の諸困難を比較し殊に后者に処して旧慣弊風を改良し日進の文明を撰取すること榛茨の未開地に當るよりも難く大なる覚悟と努力とを要する以所並に今日は大切なる農業の黎明期にして実に斯土を直ちに天上となし得るや否や岐れて存する処なりといふにあり²⁰。

先住民の旧慣弊風を日進の文明によつて入れ替えること、北海道開拓の過程におけるこの難題の解決の重要性を、賢治は認めているようである。

だが、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笹森、盗森」、また「なめとこ山の熊」のいずれも、自然と人間との異文化交流の風景を象徴的に描く一方、先住民と植民者との矛盾など、植民地主義の問題点を遠回しに示す。では、なぜ植民地主義に含まれるマイナスの側面は、

賢治文学において直接的に明かされなかったのだろうか。それは日本の植民地政策の特徴に関わると考えられる。柄谷行人は「日本の植民地の『起源』」において、日本植民地政策の特徴について、以下のように述べている。

日本の植民地政策の特徴の一つは、被支配者を支配者である日本人と同一的なものとして見ることである。それは「日朝同祖論」のように実体的な血の同一性に向う場合もあれば、「八紘一字」というような精神的な同一性に向う場合もある。「…」こうした「同一性」イデオロギーの起源を見るには、北海道を見なければならぬ。日本の植民地政策の原型は北海道にある。いうまでもなく、北海道開拓は、たんに野原の開拓ではなく、抵抗する原住民（アイヌ）を殺戮・同化することになされたのである²¹。

つまり、日本植民地主義の考え方では、被支配者と支配者との間の矛盾や衝突は、「同一性」イデオロギーの作用によって、問題視されないようになるのだ。内国植民地としての北海道の形成は、このような「同一性」イデオロギーの産物である。北海道に強い関心を持つている賢治は、そこから植民地主義の「同一性」に対する認識を持つようになったのだろう。「同一性」イデオロギー作用下の植民地主義では、先住者に対する抑圧は隠蔽され、進歩と文明をもたらす同化の論理が強調される。その結果として、先住民の生活方式にも、入植者と同じような資本の論理が導入され、先住者に対する同

化が実現される。

しかし、入植過程において、先住民と入植者の矛盾と衝突は実際に存在する。その矛盾と衝突が生じる原因はどこにあるのか。その原因は植民地主義にあるのではなく、資本の論理にあると、賢治は考えているようだ。賢治の考えでは、日本の植民地主義は同化の論理であり、先住民に進歩と文明をもたらすことは最も重要な役割である。それに対して、資本の論理は不平等性を持ち、先住民と入植者の経済的地位を分化させ、支配される側に犠牲をもたらす。ゆえに、賢治文学において、植民地主義に対する無自覚が現れる一方で、資本の論理に対する批判が行われるのだ。

6. おわりに

本稿は、宮沢賢治が考古学者の視線で描く三部作——「鹿踊のはじまり」、「狼森と叢森、盗森」、「なめとこ山の熊」を取り上げ、各作品に現れる〈自然—人間〉の関係性に注目しながら、分析してきた。北海道開拓およびアイヌ民族社会の解体という歴史状況を考察することに加え、こうした時代状況と賢治文学の照合性を明らかにすると同時に、賢治が考えている越境、異文化交流の困難さの原因、また賢治が植民地主義を眺める視線を読み解いた。

直接的な異文化接触を描く「鹿踊のはじまり」では、動物と人間が互いに観察する視線が注目され、異文化に対する探索、人間と動物との越境が描かれている。同じ入植のモチーフで繋がる「狼森と

「笹森、盗森」では、自然と人間との間に、〈贈与―返礼〉という互惠

関係が形成され、またその関係性の内実が変容する過程が描かれる。

その原因は、入植者である人間が自分の権力を拡大し、正当化しようとすることにあり、植民地主義の考え方に類似する。両作品に共通する額縁構造の聞き手の異なる行為に注目すると、自然と人間との関係性に変化をもたらすのは資本の介入だということがわかる。

「なめとこ山の熊」では、貨幣を交換の媒介とする商品経済の環境における、自然、資本の論理、人間の三者の葛藤が描かれている。〈自然―人間〉の二者関係に、資本の論理の介入によって、賢治が考えている異文化交流・越境が困難さに遭遇するのである。

三作品に対する分析から、賢治文学の表象と賢治が生きた時代の関連性が見いだせる。賢治の北海道訪問を手掛かりとして考察することによって、「なめとこ山の熊」という作品の背景には、北海道の開拓とアイヌ民族社会の解体の歴史があることは明らかである。

しかし、こうした時代状況との関連性が強いものだが、「なめとこ山の熊」において、現実における入植者と先住民との矛盾の原因となる植民地主義は、全く批判されていない。その代わりに、資本の論理に対する批判は行われている。それは、賢治の考え方では、近代日本の植民地主義は、先住民に進歩と文明をもたらすものであり、自然と人間、また入植者と先住民との矛盾・衝突をもたらすものではないからである。このように、本稿の分析を通じて、賢治が近代日本の植民地主義をどのように理解していたのかが明らかとなった。

注

- 1 「鹿踊りのはじまり」【新】校本宮沢賢治全集 第十二巻 童話V・劇・その他 本文篇』筑摩書房、一九九五年、八九頁
- 2 「鹿踊りのはじまり」、同前掲、八七頁
- 3 西成彦「植民地の擬人法」『新編 森のゲリラ 宮沢賢治』平凡社、二〇〇四年、三〇頁
- 4 「狼森と笹森、盗森」【新】校本宮沢賢治全集 第十二巻 童話V・劇・その他 本文篇』筑摩書房、一九九五年、一九頁
- 5 「狼森と笹森、盗森」、同前掲、二七頁
- 6 「狼森と笹森、盗森」、同前掲、二六頁
- 7 「なめとこ山の熊」【新】校本宮沢賢治全集 第十巻 童話III 本文篇』筑摩書房、一九九五年、二六五―二六六頁
- 8 「なめとこ山の熊」、同前掲、二六七―二六九頁
- 9 千葉一幹「貨幣と言語」『賢治を探せ』講談社、二〇〇三年、一二二頁
- 10 千葉一幹、同前掲、一三二頁
- 11 西成彦「東北文学論」『森のゲリラ 宮沢賢治』同前掲、二六頁
- 12 同前
- 13 北海道の入植歴史について、長井秀夫『日本の近代化と北海道』（北海道大学出版会、二〇〇七年）を参照。
- 14 『岩波講座 近代日本と植民地I 植民地帝国日本』（岩波書店、一九九二年）には、「内国植民地としての北海道」（田村貞雄）という節があり、アイヌ民族社会の解体について詳しく述べられている。また、一八九九年、基本的国策としての「北海道旧土人法」が制定された後、日本のアイヌ民族をめぐる状況について、高倉浩樹「先住民問題と人

- 類学——国際社会と日常実践の間における承認をめぐる論争」(窪田幸子、野林厚志編『先住民』とはだれか?』世界思想社、二〇〇九年)を参照。
- 15 田村貞雄「内国植民地としての北海道」同前掲、九六頁。また、北海道の鹿と人間の歴史について、詳しくは、藤原英司『北加伊エゾシカ物語——北海道の環境破壊史』(朝日新聞社、一九八五年)を参照。
- 16 宇田川洋「送り場と考古学」『イオマンテの考古学』(東京大学出版会、一九八九年、二頁)を参照。
- 17 宇田川洋「アイヌ文化としての送り場」同前掲、一〇四頁
- 18 宮沢賢治「修学旅行復命書」、『【新】校本宮沢賢治全集 第十四巻 雑纂 本文篇』筑摩書房、一九九七年、六三頁
- 19 宮沢賢治「修学旅行復命書」同前掲、六五頁
- 20 宮沢賢治「修学旅行復命書」同前掲、六四—六五頁
- 21 柄谷行人「日本植民地の『起源』」岩波講座 近代日本と植民地 4 統合と支配の論理』岩波書店、一九九三年、五頁

※〔付記〕引用の際に、ルビは省略し、旧字は新字に改め、仮名遣いについては出典の表記に従った。